



俳句同好会 二〇二二年度 自選三句

美保子

糶田のぼうぼうにして神の国
ふるさとや神在月の赤子抱き
初冬の手に勾玉の深みどり

真理

葉脈に背骨のありて梅雨入かな
愛鳥週間列島に風湧きて
寒日和初版の青のインクかな

君 予

野の花をブーケに新婦聖五月
ピンの位置少しずらして新曆
ティーポット茶葉の沈みて冬麗

房子

残り実の紅のそのまま寒の入
なんとなくここが定位置糸編む
自づから凍道歩く歩き方

雅 子

本棚の片隅空けて卒業す
松籟の大きくなりぬ夏隣
冬麗の三角山の麓まで

好 子

ふつくらと炊きて塩ふる今年米
残月をかかげる空や年新た
立春のさくりと割れるミルクフィーユ

信 子

曇天の風に鋭く初鴉
九枚の当選切手むつのはな
春来ると短靴はいて石蹴りし

節 子

からからと落葉に越されわが歩み
いちにちのおほかた一人蟬時雨
師を恋ひて花野を恋ひて家居かな

麻利子

鉛筆を並べて削る日永かな
残業のブラインド開け遠花火
深雪晴屋根は大きい影つくり

水 温 む

陽 美保子

俳句を始めて良かったことのひとつに、季語を知ることがあります。歳時記には俳句を作らなければ知らなかったであろう言葉がたくさん載っていて、読んでいるだけで楽しくなります。

わらはべの両足に水ぬるみけり 綾部仁喜

作者は私が師事していた先生で、今は泉下の人ですが、春になると必ず思い出す一句です。この句の季語は「水温む」。歳時記には「寒さが去って、河川や湖沼の水が暖かくなるさまをいう」とありますが、北国に住んでいると雪や氷が解ける様を想像します。いずれにせよ、春が来た喜びを感じる季語です。そこに「わらはべ」という古くて懐かしい響きの言葉と「両足」というこれまた素朴な言葉が取り合わせられていて、読んでいるだけで幸せな気持ちになります。高浜虚子は、俳句は極楽の文学であると言いましたが、本当にそうだなあと思います。一句で、いや季語のみで幸せを感じるとは、何とありがたい文学でしょう。ぜひ多くの人に俳句に出会って欲しいと思います。



